

平成24年度 先進校視察報告

訪問者： 宮城県角田高等学校 教諭 佐藤 星
教諭

《視察校(I)について》

1. 訪問先及び訪問日について

訪問先： **秋田県立能代高等学校**

訪問日： 平成24年10月18日(木)

2. 学校概要

秋田県北部を代表する進学校であり、創立85年を超える伝統校である。毎年、国公立大進学者を100名以上輩出している。「文武両道」の教育方針のもと、進学指導だけでなく、部活動にも力を入れている。2010年には軟式野球部が全国制覇を果たした。

平成19年度より、学校運営や指導方法を見直し、キャリア教育の導入を含めた学校改革を実践する「Will Project」に取り組み、同年、文部科学省の「高等学校におけるキャリア教育のあり方に関する調査研究推進校」に指定された。

3. 進路実績

年度	クラス数	国公立大学		私立大学		短期大学		専修・各種学校		公務員	民間就職
		現役	浪人	現役	浪人	現役	浪人	現役	浪人		
H23	6	95	3	173	10	9	0	21	1	10	1
H22	6	105	6	201	14	13	0	25	0	7	5
H21	6	115	4	174	16	20	0	18	0	7	2

4. 主な進路先(H23)

京都大学(1) 東北大学(7) 北海道大学(3) 秋田大学(12) 筑波大学(3) 東京外国語大学(1) 他

5. 視察内容の報告

【Will Project について】

Will Project は、①生徒に夢と志を持たせ、将来、職業を通して社会に貢献しようとする気概を育てること、②生徒に明確な進路目標を持たせることで、学習意欲を向上させ、自発的な学習姿勢を育成することを目標に立ち上げられたプランであり、5つの柱から成り立つ指導となっている(表1)。

Will Project を始めたことで、①教職員間の共通理解が図れた(生徒指導)、②推薦入学での合格者が増えたという直接的な効果が感じられるとともに、卒業生から大学卒業後の就職先が決まったという連絡が来るようになったという間接的な効果についても感じられるということであった。

表1 Will Project における指導の柱と具体的な取り組み

指導の柱	具体的取り組み(例)
(I) 基本的生活習慣の確立	○マナーアップ指導・・・ スクールマナー集会 ○規範意識の向上にむけた取り組み
(II) 自他を知り、社会を知ることで学びの意欲の高揚	○1年: 社会を知り、夢をはぐくむ。 ①職業研究 ②社会研究講座 ③ライフプラン ○2年: 自分を知り、志を確かなものにする。 ①インターンシップ ②進路先研究 ③Will プラン ○3年: 挑戦する気概を育てる。 ・進路別学習(クラス別、進路別に対応)
(III) 学習指導の改善	○45分×7コマ授業を実施(平成23年より) ○小論文・面接指導は全職員で担い、チームで担当する。
(IV) 文武両道の堅持	○部活動の奨励・活性化 ○学習時間の確保
(V) 生徒による自主的活動の助長	○生徒会活動・委員会活動の活性化 ○既存行事内容の見直し

■ Will Project における特徴的な取組

(1) スクールマナー集会について

能代高校では、規範意識の向上に向けた取り組みの一環として、「スクールマナー集会」を行っている。Will Project の指導の柱にある基本的な生活習慣の確立と、学校生活のルール及びマナーについて、生徒職員間で共通理解を図ることがねらいである。

全校生徒が対象となり、1年生の入学後まもなく、総合的な学習の時間の最初に実施している。2、3年生は一部同じ説明を聞くことになるが年度のスタートにあたり生徒職員が全員で内容について確認し、認識を新たにすると意味合いがある。また、上級生が受け身の姿勢にならないように、3年生を寸劇に登場させるなどの工夫も見られる。全校生が体育館に集まり、正しい服装・マナーについてまとめたスライドを用いて会は進められ、生徒の視覚に訴え指導していく。

この集会後に服装面や態度で不備がある生徒がいた場合、集会の内容に触れることで生徒の自省を促すことができ、また全職員が共通の基準で生徒指導を行うことができる。また、集会を行うようになってから、教員の指示を素直に聞くようになったり、生活面での落ち着きが見られるようになったとのことである。

(2) 職業研究について

夢を持たせるとともに、その実現に向けたプロセスにおける各種情報の調査力・整理力・表現力の育成を図る目的で、職業研究・進路先研究が行われている。

職業研究は、全クラス共通のワークシート（キャリア指導班作成）を用いて、1年前期に計8回行われる。（表2）

表2 職業研究のテーマと具体的な課題

	テーマ	具体的な課題
1	職業を考える	○なぜ人は働くのか。○将来の職業選択の考え方
2	夢と志を考える	○夢とは何か。志とは何か。○現時点での夢と志は何か。 ○他の高校生の夢と志を知る。○希望する分野での諸問題を書き出す。 ○自分の夢と志を改めて考える。
3	プロセスと資質を考える	○希望する職業に就くための進路を調べる（希望する職業、希望する就業地域・場所、必要な資格、望ましい進学先、学ぶべき内容） ○求められる資質・能力について調べる。（仕事の対象者、主な役割、相手から期待されること、必要な能力・資質、今後自分が身につけるべきこと）
4	自分になりたい職業の関連職種を知る	○現時点で自分が就きたい職業、職場や地域 ○関連職種とその仕事上の関わりを調べる ○関連職種のうち、自分の中で優先度の高いものを3つ順位付けする。○感想の記入
5	職業研究レポート	○これまで調べたことをレポートにまとめる。 ①仕事内容 ②その職業に就くためには？ ③どんな人を要求しているか？ ④その職業の周辺領域 ⑤その他 ○小グループに分かれ、グループ内発表を行う。代表者数名は、クラス全員に対して発表する。

(3) 社会研究講座について

①一人一人の生徒がさまざまな社会問題の存在を知り、興味・関心を持ち、クラス内での話し合い等を通してさらにその問題への理解を深めること、②大学進学や将来の進路選択の際に、問題意識や貢献意識を持って進んでいこうとする態度を養うことを目的として行われている。

研究は、①講義の聴講、②研究討議のテーマ出題、③自分の意見をまとめる、④クラス内活動の4つから構成される。平成24年度に扱われる予定のテーマは「環境問題について考える」「情報化社会の問題点について考える」「グローバル社会について考える」「科学技術と豊かな生活について考える」の4つであり、これらのテーマについて、上記①～④の手順で研究が進められる。

(4) ライフプランについて

1年間のさまざまな活動の集大成として、自分の人生設計を書くという課題である。この活動の目的は、①夢と志を持たせ、その実現に向けてビジョンを描くこと、②目標達成のために今何をしなければならないかを確認すること、③ライフプランの作成や発表を通じて、相互理解を深めることである。

作成までの日数は約 2 ヶ月である。

＜実施の手順＞

- ①校長より趣旨の説明を行う。
- ②事前準備のワークシートが配られ、それを各クラスの正副担任の添削を受けながら仕上げていく。
- ③ワークシートが完成した後、休業期間の課題として実際にライフプランの作成に取り組みさせる。
- ④休業明けに提出し、各クラスで発表会を行う。
(まずはグループ毎、その後代表者 2 名がクラス全体の前で行う)

注意事項として、①あくまでも現時点での考えであることを強調し、深刻になりすぎず楽しみながら作成すること、②保護者や先生・友人など多くの方に相談しながら作成すること、が伝えられる。

(5) インターンシップについて

2 年生全員を対象に 3 日間で実施される進路行事である。目的は、生徒が希望する職業への理解を深めながら自己の将来ビジョンを構築するきっかけとし、今後社会人として要求される姿勢や能力を身につける機会とすることである。

年度初めに実習希望先の調査を行い、4 月の下旬には事業所交渉・アンケートによる予備依頼を行う。新規開拓の事業所はキャリアアドバイザーによる事業所への訪問依頼を行っている。実施先の企業は、県内の事業所が多いが、中には県外（東京、福島など）での実習を希望する生徒もいる。

① 実施期日等について

教員が依頼事業所と連絡を取り打診するが、電話による実習内容の確認や調査研究については極力生徒個人に行わせている。

② 実施直前の打ち合わせについて

担当教員が生徒と事業所へ行き、一緒に参加する。インターンシップ前には、自己紹介シート・企業研究シートを作成したり、講師を招いてマナー講習を行ったりと入念な事前指導を行っている。

③ 実施後

報告書と礼状の作成を行い、1・2 年生の前での校内発表会が行われる（代表者数名が発表）。

(6) 面接・小論文指導について

3 年次の面接・小論文指導については、全職員に担当が割り振られる。その際、生徒の志望先の学問分野毎に「看護系」「文学部系」などの教員のチームが作られ、チームに生徒が割り当てられる。どのチームに所属するかは、新転入の際に決められ、転出した教員の枠に新しく来た教員が補充されるという形を取る。ただし、英語科はどのチームにも所属せず、英語の課題文がある大学の小論文については学問系統に関係なくすべて添削を担当することになる。

チーム体制指導の利点は、教員の指導ノウハウが蓄積されていくことである。前年度の指導が次年度に活かせるので、指導に向けた準備等の負担が減るとともに、毎年指導技術を高めていくことができる。

《視察校(Ⅱ)について》

1. 訪問先及び訪問日について

訪問先：**岩手県立福岡高等学校**

訪問日：平成 24 年 10 月 19 日(金)

2. 学校概要

今年度、創立 111 周年を迎えた岩手県屈指の伝統校である。1 学年約 190 名のうち、半数近い生徒が国公立大学に進学する一方で、弓道部は昨年度全国制覇し、野球部は通算 10 回甲子園出場を果たすなど、部活動も非常に盛んである。校是は「文武両道」「質実剛健」である。

平成 17 年度よりダッシュ 70 プランを策定し、生徒の学力・人間力を高め一人ひとりの進路実現を図っている。

3. 進路実績

年度	クラス数	国公立大学		私立大学		短期大学		専修・各種学校		民間就職・公務員
		現役	浪人	現役	浪人	現役	浪人	現役	浪人	
H23	5	84	0	72	0	13	0	35	1	9
H22	5	76	1	83	4	29	0	53	0	16
H21	5	92	2	67	1	15	0	68	0	13

4. 主な進路先(H23)

東北大学(3) 岩手大学(17) 弘前大学(7) 秋田大学(5) 北海道教育大学釧路校(3)
北海道教育大学函館校(2) 岩手県立大学(11) 他

5. 視察内容の報告

【ダッシュ70プランについて】

ダッシュ70プランは①地域のリーダー（思考力・感性・教養を備えた人物）の育成、②学力向上（進路実現のため）、③表現する力の育成、という3つの目的の下に策定され、「3年以内に国公立大学合格者数を70名以上とすること」を指標に実践されているものである。平成19年度入学生における具体的な取り組みは表4を参照されたい。

表4 ダッシュ70プランに基づいた平成19年度入学生における実際の取り組み

1. 幅広い学力層への対応	○成績層別指導の徹底 上位層 <u>Top10サク</u> (2年後半からは <u>超トップ10サク</u>) 下位層 徹底的な補習 中位層 授業+添削
2. 学習習慣の確立	○学習合宿(1年6月の最初の考査前)
3. 生徒指導の徹底	○「凡事徹底」(挨拶、整容、清掃) ○毎週月曜に学年 SHR → <u>小さなことも見逃さず徹底的に指導</u> したことにより、1年次多かった生徒指導案件が2年次には激減
4. 進路意識の高揚	○進路ノートの作成と活用 ○「未来からの手紙」(3年生からの3行メッセージ) →センター試験直後に後輩へ向けて今の心境や後輩へ伝えたいことを書いてもらう。
5. 総合的な学習の時間の有効活用 →キャリア教育の実践	キャリア教育:職業観の醸成と進路意識の高揚、進路目標達成の3年間を通じた一環指導 [1年:体験を通して職業観を醸成] ○職場訪問 ○大学訪問 ○ライフプラン作成 [2年:将来学ぶべき学問と職業観の整合性] ○課題研究 ○インターンシップ ○オープンキャンパス ○保護者文集 [3年:進路目標の達成とその後も社会貢献できる人材の育成] ○志望理由書作成 ○進路別学習

■ダッシュ70プランの実践における特徴的な取組

(1)成績層別の指導について

1) 上位層への指導 : Top10サク

Top10サクは、難関大学等を志望する生徒及び各教科で上位に位置する生徒の実力向上を目的に行われる添削指導である。実施教科は国・数・英（2年後半から理系の理科も検討）であり、各教科ごとの上位者20名者程度を対象に行われる。実施内容は、①毎週1回添削問題を課し提出させる、②週に1回解説会（昼休み）を行い、理解の徹底を図る、というものである。

参加候補者にはガイダンスを行い、本人の意思を確認後にメンバーを決定する。メンバーの入れ替えは原則として行わないが、必要に応じて追加は行うとのことである。2年後半からは、東大・京大・医学部志望者向けの超 Top 添削も行われている。超 Top10 サクにおいては、英数国理の別メニューによる添削指導に加え、東大見学会や予備校講習への参加も行われる（同窓会からの費用支援あり）。

2) 下位層のフォロー：朝7時半からの補習

平成19年入学生には低学力層の生徒も多数おり、通常の定期考査前の補習だけではカバーできないほど学力面で問題を抱えていた。そこで、後期中間考査後に11月～3月まで毎朝7：30から30分間の特別補習を実施した。内容は、毎日同じことの繰り返し（ドリル）であり、漢字・英単語の書き写しや因数分解・ルート計算、周期表など作業的な課題に取り組ませた。補習においては、遅刻・欠席をする生徒はおらず、誰一人脱落することなく取り組んだ。1年次最後の追考査では、「初めて90点をとった」等、今まで味わったことのない達成感を得た生徒や、「生まれて初めて勉強で先生に手をかけてもらった」など涙ぐむ生徒もいたとのことである。

下位層への指導を手厚く行うことで、社会に出たときに必要になる力をつけさせたいという教員のメッセージが下位層の生徒へ伝わるとともに、他の生徒への波及効果もあった。つまり、「先生は学力の高低にかかわらずみんなに手をかけてくれている」と生徒が認識し、学年全体の結束が強くなった。進路が違っても学年全体で頑張るといい雰囲気ができたとのことである。

(2) キャリア教育の実践

1) 職場訪問（1年次）

地域や社会の最前線で活躍されている方々の職場を訪問することにより、仕事の内容やその職に就くまでの過程、社会人としての心構えなどを学ぶ機会を提供し生徒の職業観の育成を図ることを目的に行われている。実施時期は8月で、訪問先は盛岡市内を中心とした約40事業所で、各クラス5名程度のグループを作り、希望する事業所を訪問し、質問や体験を行う。訪問した内容については、文化祭でポスター発表を行う。

2) 課題研究（2年次）

課題研究では、現代社会の抱える課題について各教科の授業で学んだことを融合し考察する。

【ねらい】

- ①探求内容をまとめて小論文文化し、発表をしあい、相手に伝える能力を養う機会を提供し、生徒の職業観の育成を図ること
- ②自己理解及び将来の進路に向けて探求し、進路目標の明確化を図ること

実施にあたり、6つのカテゴリー（①国際理解・国際関係コース、②数理情報コース、③地域・環境科学コース、④福祉・健康・スポーツコース、⑤芸術・文化コース、⑥就職コース）を設定し、その中から個々の生徒の進路意識や興味関心に応じて、5～6名のグループ（クラスの垣根なし）を作る。テーマ毎に、2学年団を中心に指導講師を決めて、共同研究を行う。研究は準備期間を含めて約7ヶ月間であり、この間に文献の収集・研究、オープンキャンパス等への参加や関連施設訪問、インターンシップ（就職コース）、また自己啓発の場として学部講演会（模擬講義）などの進路行事も取り入れる。

中間発表として、①文化祭でレポート発表するとともに、②最後には報告書を作成し、③カテゴリー内の発表会后、④全体発表会を行う。

3) 保護者文集（2年次）

2年生の保護者に、現在就いている仕事の内容やその職に就くまでの過程、進路選択に向けての心構え、わが子に望むことなどについて書いてもらい、それを共に読むことによって、相互理解を深め、生徒の進路意識の高揚と醸成を図ることを目的としている。

7月の三者面談で保護者へ原稿依頼（タイトル「子どもたちの進路開拓に寄せて」）をし、夏休み明けに原稿を集約する。冊子にして11月の2学年PTAで配布している。

(3)英語科の取り組みについて

E ダッシュプランは、学力向上のための校内プロジェクトの一環として平成 22 年度に発足したものである。E ダッシュ以前には、受験英語かコミュニケーション英語かという二極対立型の概念が校内に存在し、それらを一元化した「受験にも対応できる骨太のコミュニケーション能力」という概念は教室内に存在していなかった。本プロジェクトの研究実践では、文法訳読式の授業からの脱却を図り、4 技能を統合した task-based の授業へと改善することから始まった。

4 技能統合型の授業では、活動の「つながり」を重視している。例えば、内容理解後の音読は、Reading と speaking をつなぐ訓練、ストーリー・リテリング（キーワードや絵をヒントに英文を再生する活動）は、リーディングから自由なアウトプットへの橋渡しとして位置づけるなど、英語科内での共通理解を図り実践している。

【実施上の工夫】

- ①教科書を継続して採択し、すべての学年の英語科教員が今どこの学習に取り組んでいるか分かるようにした。また、前年度利用した教材を次年度に改善して使うことで、指導の蓄積を図った。
- ②指導と評価の一体化を図るために、**FUKUOKA-CAN-DO-GRADE**を作成した。これにより、筆記試験では評価しきれない要素について、教師と生徒が同じ評価基準で学習を振り返り、次の学習へと結びつけることができた。

E ダッシュプランに基づく 4 技能統合型の授業を実施した結果、生徒に変化が見られた。英語でのエッセイを書くように指導すると、以前は「文法が分からないから書けない」とうつぶんでいたが、「今持っている力が大切で、自分の考えに正解も不正解もない」と後押ししてやることで、積極的に表現活動に取り組むようになり、今では80 語程度のエッセイを 5 分で書ける生徒も出てきた。まずは「流暢さ」を求める訓練から始め、徐々に「正確さ」「適切さ」へと意識を高めていく方策が功を奏したようである。

《視察校(Ⅲ)について》

1. 訪問先及び訪問日について

訪問先： 岩手県立盛岡第三高等学校

訪問日： 平成 24 年 10 月 19 日(金)

2. 学校概要

今年で創立 50 周年を迎える県内有数の進学校であり、ほぼ全員の生徒が大学進学を希望し、例年 200 人余りが国公立大学に合格している。開校以来「随処為主（ずいしょいしゅ）」（付和雷同せず、主体性を持って生きなさいという「臨済録」の教えで、三高生のあるべき姿の基本を示している）を校訓とし、いかなる場合でも主体的に生きることでできる生徒の育成を目指している。また、「文武不岐」のもと、部活動も活発であり、毎年様々な部や委員会が全国大会に出場している。

3. 進路実績

年度	クラス数	生徒数	国公立大学		私立大学		短期大学	専修・各種学校	民間就職・公務員
			現役	浪人	現役	浪人			
H23	8	310	221	14	202	30	13	3	2
H22	8	315	220	31	208	56	17	8	0
H21	8	321	229	22	202	33	8	5	0

4. 主な進路先(H23)

東北大学(37) 岩手大学(82) 弘前大学(17) 筑波大学(8) 東京外大(1) 大阪大学(1) 他

5. 視察内容の報告

(1) Dプランについて

Dプランは、盛岡三高での総合的な学習の時間の取組である。基本理念は、「自ら考え、自ら学び、自ら発信」であり、ディベートに到達するまでに必要となる情報収集力、思考力、判断力、コミュニケーション能力等を涵養していくというものである。

生徒はディベートに向けた課題に取り組むことで、「メモの取り方」や「意思伝達に必要な話法」などの基本的な技術について学び、資料にもとづいて自分の考え方を論理的に述べる訓練をしていく。平成24年度1学年では、「10年後の日本は、電気を何によって供給[発電]する？(原発再稼働の賛否を含む)」というテーマで、資料に基づいて意見を表明したり、グループ毎に話し合いを行い、クラス全体の前で発表させた。

1年次は基本的な練習から始め、班の中でのレポート発表や、グループ毎のクラス発表が中心となるが、2年次には実践的なディベート大会が主となりクラス対抗の「試合」が行われ、お互いに競いながらディベート力を高めていく。

(2) 図書館改革について

以前は校内図書館の利用率が県内でも低い方であり、ほとんど利用者がいない状態であったが、現在では県内で最も利用者の多い図書館となっている。この変化を起こした「改革」は、次のように行われた。

- ①図書館を常時開館の状態にしたということである。もともと司書教諭が図書館に常駐しておらず、生徒が利用する度に鍵の開閉を行っていたが、これをなくした。本の貸し出しの際にはセルフサービスとし、生徒の自主性に任せた。その結果、本の紛失が増えるということは起こったが、本は消耗品と割り切り現在のやり方を継続している。
- ②「図書館＝本を読むところ」というイメージを払拭し、何をしてもいい多目的スペースへと変えたことである。実際、館内には美術部の絵が展示されたり、机を移動させて吹奏楽部が演奏会を自主的に行ったりと様々な目的で利用されている。一番利用方法が多いのは自学自習であり、多くの生徒が朝や放課後の時間に図書館で学習に取り組んでいる。

(3) 授業改革について

2008年に学校改革の中心を担う経営企画課が立ち上げられ、「三高改革」がはじまったが、その中心となったのが授業改革である。授業改革にあたり、最初に行われたのは課題や課外学習のスリム化である。それまでは、生徒が深夜まで取り組んでも終わらない量の課題が出されていた。これを改め、授業そのもので学力を付けていくという本来の姿に立ち返り、課題は最低限の量に精選し、生徒の自主性を尊重した家庭学習の重要性を伝えるようにした。

授業の充実のために、朝の課外学習を取りやめた上で、1日のコマ数は7コマと変えずに、1コマを45分から50分にした。授業方法は生徒が能動的になる「参加型授業」を目指し、授業を作り直していった。授業中は、生徒が単に教師の話を聞くだけの「観客」ではなく主体的に参加する「プレイヤー」であることを求め、思考力・表現力の育成に努めている。

地歴科では、地理・世界史・日本史の教員で学習指導要領を改めて読み込んで分析し、科目や単元で「求められる学力」を具体的に把握した。知識と共に、思考力・判断力・表現力などを育む重要性を確認し、これらを育てるために参加型授業を始めた。その結果、センター試験での得点が目標値を大きく上回り、学習指導要領に準じた『求められる力』を育てることが、受験対応力にも十分つながるという共通認識ができた。

この「求められる力」は、Dプランのねらいとも密接に関連している。Dプランと教科学習が両輪となり、論理的思考力や発信力が身につく、さまざまな教科で初めて出会う問題にも積極的に取り組もうとする姿勢が見られている。

授業改革は現在でも進行中であり、今の中心的話題は「予習は本当に必要か？」ということである。各教科主任で議論を重ね、生徒が正しい勉強方法で確実に学力をつけていけるように支援していくことが今後の課題である。

(4)授業公開シートについて

授業改革の一環として、校内での授業公開を年間約 30 回行っている。授業公開を導入時に留意したのは、無理なく継続でき、かつ教科の壁を超えて学びあえる体制を作ることであった。そのために作られたのが、授業公開シートである。

授業公開シートは、「関心・意欲等を持たせるための工夫」など、授業方法の工夫をポイントとして示してある。指導案ほど詳細な流れを書く必要がなく、他教科でも指導の観点が分かるようになっている。参観者は気づいた点をコメント欄に記入し、直接授業者にシートを渡すようになっている。以前は、授業を全て見ずにコメントすることが失礼であるような雰囲気があったが、「5分でも10分でも見学することは全く失礼にあたらぬ」と周知することで、気軽に見ることができるようになっている。

《視察校による本校への提言》

提言1：スクールマナー集会を年度初めに実施する（能代高）

本校での服装・頭髪指導において課題となるのが、教員間の共通理解である。また、服装面で注意を受ける生徒の大半は、明確な校則違反をしているというより、着こなし（スカート丈、シャツのボタンなど）に問題がある。よって、1年生の入学時から、正しい着こなしについて周知し、視覚に訴え理解させることで改善させることができるのではないだろうか。基準を明確にし、生徒が自らを正すとともに、教員が共通理解のもとに継続していくことで、服装・頭髪さらにはマナーについても改善していければよいのではないか。

提言2：校内授業研究において授業公開シートを導入する（盛岡三高、福岡高）

授業公開シートを導入することで、指導案作成にかかる時間を教材研究や授業の改善に使うことができ、また他教科の教員も指導上の工夫に焦点を当てて参観できるので、教科の枠を超えて授業の良さをお互いに学ぶことができるようになる。また、授業公開シートでは授業の流れよりも工夫に焦点が当てられているため、授業途中からの参観でも、他の教員が十分に学ぶことができる。形よりも中身を重視し、気軽に参観できる雰囲気を作ることで、校内の授業研究が活性できるのではないか。

提言3：総合的な学習の時間を充実させるーキャリア教育の導入（能代高、福岡高）

本校の総合的な学習の時間では、大学見学会やオープンキャンパスの事前・事後指導や、小論文指導、「新書を読む」などが行われている。これらを通じて、大学進学に向けた意識の高揚を図り、文章を書くことで表現力を高めることができる。しかし、本校の実践では、キャリア教育の観点が抜けており、「自己理解」「職業理解」「調べ学習」などの活動が行われず、生徒の自主性に任されているのが現状である。

キャリア教育の観点を取り入れた活動を導入することで、そもそも自分が何のために大学に行くのか、何のために学習をしているのかが明確になり、生徒の自主的な学習を促すことになるのではないか。

また、能代高校や福岡高校では、総合学習の時間を充実させたことで、大学受験における推薦合格者数の増加につながったとのことである（特に福岡高校では、合格率が大幅に上がった）。生徒に自分の進路について真剣に考えさせるとともに、様々な活動で発表の機会を増やしていくことで、推薦入学時に求められる自己表現力をつけさせることができるのではないか。

今回視察した3校の実践それぞれに良い点があり、本校で導入しやすいものから積極的に取り入れ、3年間を見通した計画を立て、総合的な学習の時間を充実させていくことが必要ではないだろうか。

提言4：成績層別指導のあり方を再検討する（福岡高）

現在、本校では国公立クラスを対象にチャレンジタイム（朝の課外授業）が行われ、成績下位層を対象に定期考査前の学習会などを行って学習面のフォローをしている。また、数学・英語の授業では習熟度別の授業を行うことで、成績層別の指導を行っている。これらの取組の効果について、再検討するべきではないか。

まず、チャレンジタイムであるが、国公立クラスを対象にしているものの、このクラスは入学・進級時の希望制によるものであり、必ずしも上位層を意味していない。普段の授業の理解でさえ不十分な生徒も複数おり、課外授業で応用的な内容に取り組みさせることで消化不良を起こすことも考えられる。むしろ普段の授業を充実させ、朝の時間は授業の予習・復習や、苦手分野の学び直しなどの時間にした方が効果的な生徒もいる。多様な生徒がいることを考えると、この時間を「朝自習」の時間として自学自習に取り組みさせ、授業で最大限に学ぶための準備の時間としてもよいのではないか。成績上位の生徒については、福岡高校の「Top10サク」を参考に、個別に対応し、自ら学び積極的に質問をする姿勢を作らせるのもよいと思う。

次に習熟度別授業であるが、福岡高校や盛岡三高の「参加型授業」では、様々な学力層の生徒がいた方が多様な意見が出たり、教え合いの場面ができたりとプラスの効果があるという考えもある。授業の方法や目標により、習熟度別授業の利点・欠点が出てくるため、改めて授業のあり方を検討してもよいのではないだろうか。

提言5：面接・小論文指導において教員チームを編成し、指導の蓄積を図る（能代高）

本校では能代高校と同様に、全職員が面接・小論文指導に割り当てられるが、毎年どの分野を担当するかは変わってくる。能代高校の実践を参考に、チーム編成を行い特定の分野での専門性を高めることで、過去の指導経験を活かし、より適切なアドバイスができるようになるのではないだろうか。

～視点～

1：進学指導を強調することで、受験生が離れることもある (福岡高)

福岡高校の生徒数は平成24年5月1日の時点で、1年201名、2年152名、3年191名である。2年次の人数が大分少なくなっているが、これは生徒募集の際に進学指導を強調しすぎたためであるという。大学進学への意識が高い生徒は盛岡へ流れる傾向にあり、その中で生徒数を確保するためには、幅広い学力層に対応し、「勉強もでき、部活動にも励むことのできる学校」をアピールしていく必要があるということである。現在、福岡高校のキャッチフレーズは「東大から就職まであらゆる進路希望に対応する」というものである。本校も今後の生徒募集にあたり、募集層をどこまで広げて指導していくべきか考える時ではないだろうか。

2：45分×7コマの授業でよいか？ (能代高、福岡高、盛岡三高)

視察した3校の時程を見ると、能代高[45分×7コマ]、福岡高[45分×7コマ]、盛岡三高[50分×7コマ]であった。能代高・福岡高では、新課程が始まることもあり、50分授業に戻すことも検討している。いずれにせよ、各学校の目標に合わせて、どの時程が良いかを検討し、積極的に変更しているという印象を受けた。それぞれにメリット・デメリットはあるので、本校で最も適切なものはどれかを検討していく必要があるのではないかと。

3：「時間を生徒に返す」という視点も大事ではないか (盛岡三高)

盛岡三高では、改革以前の「物量作戦」を反省して、課題を減らし朝課外を廃止し、教員は授業の中身で勝負するという方向に変えた。その結果、以前生徒に蔓延していた疲弊感、やらされ感、追い詰められ感は大分解消され、生徒に活気が戻り、自ら考え自主的に取り組む姿勢が出てきたという。本校の取り組みは、盛岡三高に比べれば、「物量作戦」というほど多くの課題は課していないが、生徒に「やらされ感」があることは否定できない。生徒が自ら学習方法を選択し、自主的に学習に取り組めるように授業等で促していく必要があるのではないかと。その上で、現在の課外授業や与える課題等についても見直していく必要があるのではないかと。

4：授業改善のための「改革」の必要性 (福岡高、盛岡三高)

盛岡三高では、「授業改革」が行われ、「参加型授業」への転換が図られた。また、福岡高では英語科のEダッシュプラン、数学科のMダッシュプラン（各学年毎に目標を設定し、学力向上を図る数学科の取組）など校内プロジェクトによる授業スタイルの大幅な変更が行われている。現行の方法で行き詰まりがある場合、根本的にやり方を変えていく決断も必要になる。他校での実践を積極的に取り入れ、時には従来のやり方を捨てるという決断もしながら、「角高スタイル」を作り上げていく必要があるのではないかと思われる。